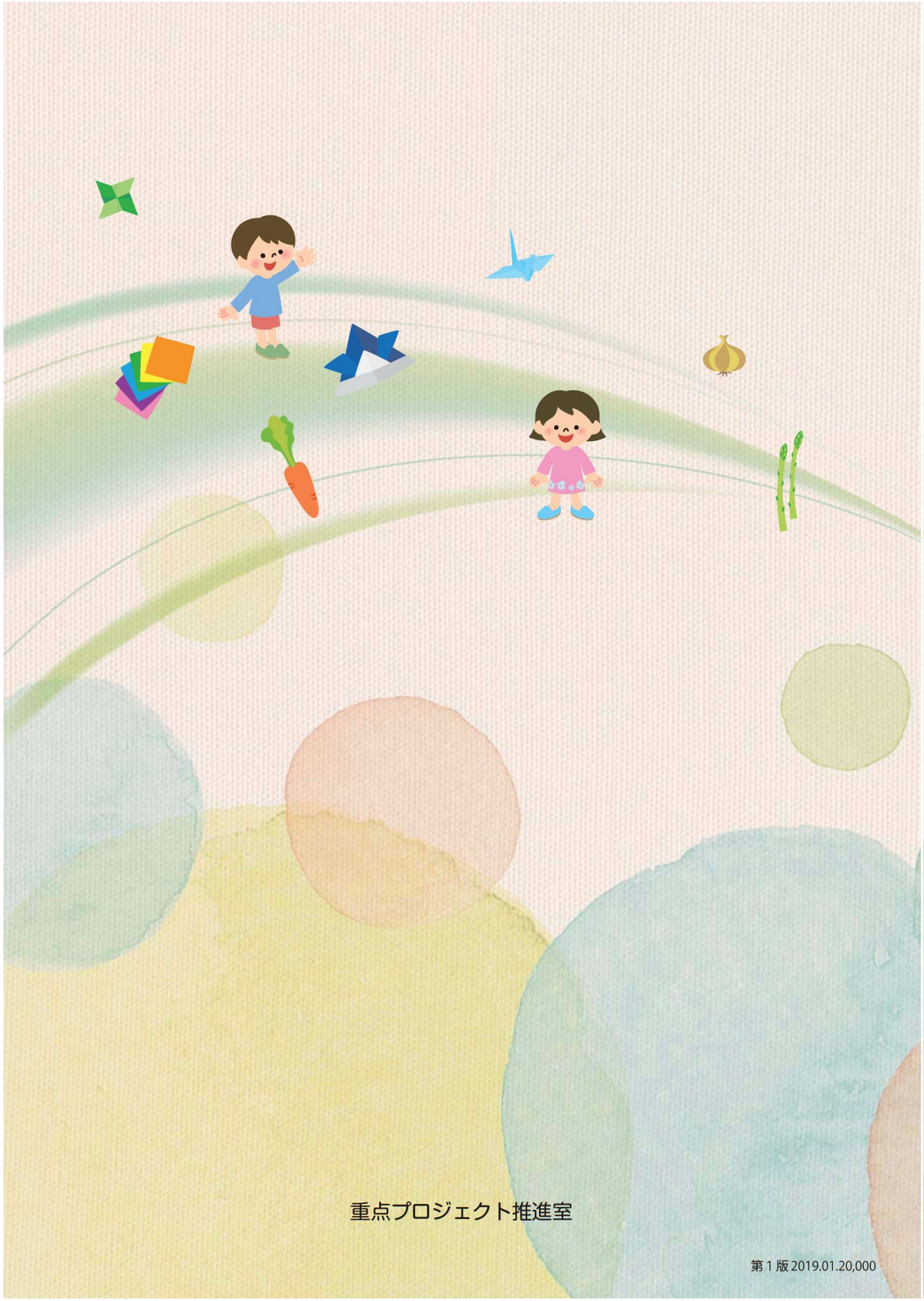


重点プロジェクト推進室

第 1 版 2019.01.20,000

子どもたちを育むために

―取り組みサポートブック―

浄土真宗本願寺派(西本願寺)

目次

1 「子どもたちを育むために」

2 子どもたちを取り巻く現状

4 ひとりじゃないよ みんなで食べよ
子どももおとなも「深川ルンルン食堂」（山口教区 大津東組 淨土寺 荻 隆宣）

6 学校でもない、家でもない、
お寺ならではのホッと出来る居場所でありたい
「てらこやハッピー」（大阪教区 三郡組 西教寺 浅井 るり子）

8 子どもの学習を支援する「とむとむききる」（北海道教区 上川南組 法生寺 藤田 安樹子）

9 インドやネパール在住のチベット難民への支援
「ダーナ・インターナショナル・センター（DIC）」（備後教区 比婆組 西楽寺 定光 大燈）

10 「おてらおやつクラブ」の取り組み（東海教区 額田組 明願寺 松野尾 浩慈）

12 事例紹介
本願寺派の組や寺院は、他にもこんな活動をおこなっています。
お仏飯でホームレス支援（兵庫教区 神姫組 專光寺）
コートジボワールの子どもたちに愛の靴を送る支援（岐阜教区 長良組）
書き損じハガキで奨学金プロジェクト（北豊教区 門司組）
チェルノブイリ被爆児たちの支援（北海道教区 上川南組 天寧寺）

14 「子ども食堂」開設へ向けたQ＆A

18 西本願寺「みんなの笑顔食堂」

築地本願寺「寺小屋」お寺の学び舎 ―慈光院教室―

20 「子どもたちの笑顔のために募金」について

21 あとがき「活動を始めるにあたって」

「子どもたちを育むために」

私たちはみな、一人ひとりの人生を生きて行かなくてはなりません。誰も代わってはくれない私の人生。だからこそ阿弥陀如来は、その苦難の人生を歩む私たち一人ひとりを必ず救うと願いをたてられ、南無阿弥陀仏の喚び声となって、常に一緒にいてくださいます。私たちは決してひとりぼっちではなかったのです。

その阿弥陀如来の願いを聞く私たちは、誰一人取り残されることがない、自他共に心豊かに生きる社会をめざしていくべきものなのでしょう。

近年、日本の将来を担う子どもたちが大変厳しい状況に置かれていることが明らかになってきました。孤立、いじめ、虐待、低学力などさまざまな問題を引き起こしかねない「貧困」という状況です。また国外においては、極度の「貧困」により、今日のいのちも脅かされている子どもたちがいます。

そこで、今まで宗門内において続けられてきた非戦平和をはじめとする取り組みの中で、仏教徒・念仏者として行える活動のひとつとして、特に＜貧困の克服に向けて～Dānaｆ orＷ orldＰ eace～＞ ―子 どもたちを育むために―が重点プロジェクトの実践目標として定められ、宗門全体の取り組みとして進められています。

阿弥陀如来の願いの中で、私たちは決してひとりぼっちではない人生を生きています。念仏者としてそれを知る私たちは、現実社会にあって孤立に向かいかねない子どもや、今すでに苦しみの中にある子どもたちに、何ができるでしょう。

褒めてくれる人がいる。怒ってくれる人がいる。一緒に笑ってくれる人がいる。一緒に悲しんでくれる人がいる。黙ってそばにいてくれる人がいる。後ろでそっと見守ってくれる人がいる。

お寺はそのぬくもりを伝え、孤独に向かいかねない子どもたちの居場所になることができるはずです。誰かの悲しみや苦しみに少しでも気づいて、それぞれが誰かのために一歩踏み出していけば、大きな歩みへとつながっていきます。本書は、その一歩のために作成されました。子どもたちを育むため、共に歩んでいきましょう。

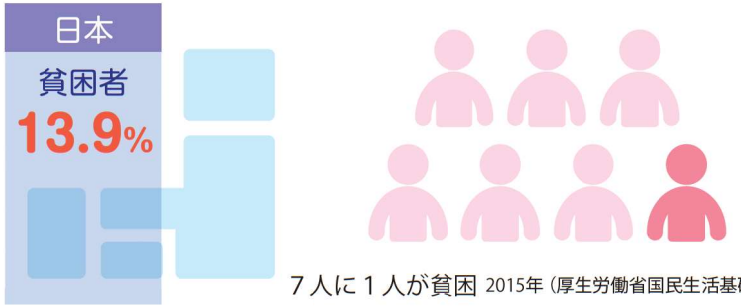
子どもたちを取り巻く現状

1

日本では子どもの「７人に１人」が貧困によって苦しんでいます

今、日本では多くの子どもたちが「当たり前」に出来ていることを、貧困のために出来ない子どもが７人に１人います。

貧困の子どもたちは、経済的困窮を原因として、仲間はずれ、いじめ、不登校など、さまざまな困難な状況に陥（おちい）る割合が高く、その結果、居場所が失われ、寂しさや不安の中で暮らしているといわれています。こうした貧困の子どもは社会の中で見えづらいのですが、元気そうに見える子どもが、実は多くの苦しみや悲しみを抱えていることは少なくありません。



７人に１人が貧困 2015年（厚生労働省国民生活基礎調査）

2

世界では、「10人に１人」が貧困によって命の危機に瀕（ひん）しています

世界では、テロや武力紛争、経済格差などの理由で１日に1.9ドル（約200円）以下で生活を強（し）いられている人々が「10人に１人」いるといわれています。アフリカ、南アジア、南アメリカなどに多い極度の貧困状態に置かれた人々は、清潔な水や食べ物はもとより、住居や病院など、生命維持に必要最低限な物やサービスすら入手困難な状況にあります。

こうした状況の子どもたちは学校には通えず、劣悪な環境下で働かなければならないことも珍しくありません。

「お腹いっぱいご飯を食べたい」

切なる願いを抱く子どもが、5.6秒に１人の割合で５才になる前に亡くなっている現実が世界にはあります。

10人に１人が極度の貧困 2015年（世界銀行のホームページより）

ひとりじゃないよ みんなで食べよ 子どももおとなも「深川ルンルン食堂」

ながとチャイルドサポート協議会 代表 ● 山口教区大津東組浄土寺　荻隆宣住職

毎月第４土曜日午後４時半。長門市内各地から子どもと保護者が集まってきます。集まる先にあるのは、長門市中心街にある光浄寺というお寺。荻住職は2017（平成29）年の11月に、ながとチャイルドサポート協議会を立ち上げ光浄寺の本堂と厨房を借りて深川ルンルン食堂を始めました。毎回約100名の子どもたちとその保護者が集まります。

「ようこそルンルン食堂へ。この食堂は仏さまへのお供えをみんなでおすそわけしていただきますので、まずは仏さまにお礼をしましょう」と受付をする光浄寺の住職が、利用者一人ひとりに声をかけますので、どの子も阿弥陀さまへの合掌礼拝からルンルン食堂の利用が始まります。

食事は自由に食べられるものだけを自分で取るビュッフェ形式。地元の生産者から提供された食材を使った料理が並びます。調理をするサポーター（ボランティアスタッフ）は旬の食材の旨さを引き出すために、味付けは薄味に心がけています。

重点プロジェクト推進室で作った「食事のことば」のカードを置いて「いただきます」「ごちそうさま」はそれぞれで。子どもたちは食事を終えると、横にいる子と遊び始めます。学校や学年など関係なく、おたがいの名前も知らず、おにごっこやかくれんぼ、けん玉やおりがみなどで本堂と境内をところ狭しと動き回って遊びます。

お茶を飲みながら保護者同士で集まって話に花を咲かせている姿も楽しそうです。子どもたちがケガをしないように見守るサポーター、保護者の話に傾聴するサポーターもいます。アンケートを取ってみると食堂に来る理由が「楽しくてゆっくりできる」「新鮮で美味しい」。お寺という空間に落ち着きを感じてくれているようです。

夕方６時にはみんなでお寺の鐘を撞きます。

そしてお夕事。重誓偈のお勤めの最中は食事中の人も必ず箸を置きます。

そして午後７時にはみんなでお互いに「ありがとう」と声をかけながら家路に着きます。その様子は、今まで少年連盟やキッズサンガで取り組んできた子ども会となんら変わりがありません。むしろ今まで宗門が取り組んできた運動がベースにあるからこそできる活動です。

「ひとりじゃないよ」が深川ルンルン食堂のテーマです。月一回の食事では毎日の空腹は満たされません。だからこそ本当に人生の支えとなるものに気づいてほしい。たとえどんな苦しみの境涯にあっても阿弥陀さまの温もり、人の温もりを感じて「ひとりじゃないんだ」と歩んでくれることを、深川ルンルン食堂は願いながら活動を続けます。

学校でもない、家でもない、お寺ならではのホッと出来る居場所でありたい「てらこやハッピー」

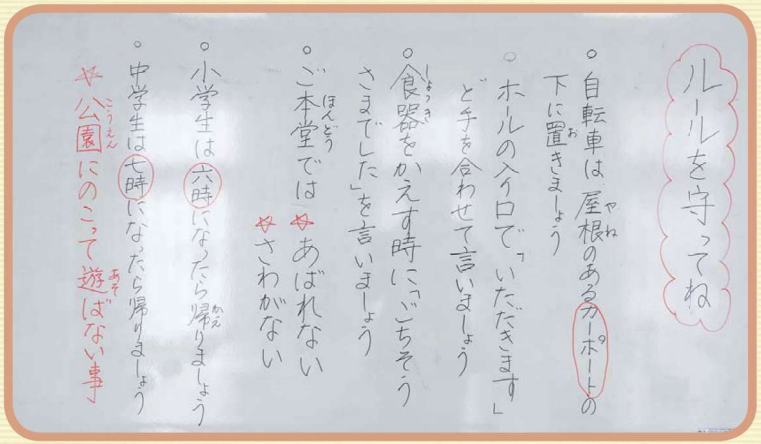
大阪教区 三郡組 西教寺　浅井 るり子 坊守

毎月第３木曜日になると、ご本堂や棟続きにある門徒会館のホールの中で子どもたちのあふれんばかりのエネルギーが弾けます。宿題をする子、ゲームをする子、近所の大学生のお姉さんと折り紙をする子、中にはプロレスごっこをして叱られている子もチラホラ。そして、ホールに移って、皆で食前のご挨拶をして、相愛学園製作のCD「いただきます！ごちそうさま！」が流れる中で、ワイワイガヤガヤと食事をします。夏休み中には流しソーメンもしました。2017（平成29）年３月から始めた子ども食堂「てらこやハッピー」もようやく軌道に乗ってきました。

約20年前に、お通夜やお葬式にと浄財で建てて頂いた「門徒会館」。立派な厨房には業務用のお鍋や炊飯器もあり、食器も100人分位ありますが、あまり利用する人もいなくなり、もったいないという想いだけが流れていました。

一方で、最寄の小学校の校医さんが「夏休み明けになると体重が減っている子がいるんだよ・・・」と教えてくれ、何か地域の子どもたちの為にできる事はないかという想いが大きく膨らんでいました。そんな時に「子ども食堂をしない?」と声をかけてくれる仲間が現れ、想いを同じくしていた５人で準備もあまりしないまま「とにかくやってみよう」という感じで始めました。

初めの頃は、目の前の問題に振り回される毎日でした。食材は？広報は？ボランティアは？「子どもがうるさい！」とクレームの電話もかかってきました。でも不思議な力が働いているかのように周りに



いる人たちが私の背中を押してくれました。仏婦会員・学生・民生委員・市議会議員・管理栄養士・友人などがボランティアスタッフになり、案ずるより産むが易しと感じる事も多くありました。今でもその善意の波は大きく広がっていて、今では神戸や大阪から月１回車を飛ばして手伝いに来てくれる人も現れました。本当に色々なご縁や人とのつながりに感謝しています。

今でも、本当に救いを求めている子たちは来ているのだろうか、子どもたちをお客さま扱いし過ぎてはいないだろうか、などの疑問はありますが、細く長く続ける事で何か問題解決の道も見えてくるのでは、と思っています。今後は、学習支援やキャリア教育もしていきたいです。

子どもの学習を支援する「とむとむききる」

北海道教区 上川南組 法生寺　藤田 安樹子 坊守

北海道旭川市は少子高齢化が進んでおり、法生寺（藤田興至住職）のある西神楽地域では、65歳以上が人口の47%に上り、子どもの割合は８%ほどです。

法生寺の坊守、藤田安樹子さんは地域の人と協力して、子どもの学習支援「とむとむききる」を始めました。

西神楽地域では、塾や児童館など子どもが集まれる場所がなく、塾に行こうとすると５キロほど離れたところまで行かなければなりません。安樹子坊守は法生寺に嫁いだ時から、地元で子どもの居場所を作ることが出来ないかと考えていました。

そこで、西神楽で学習支援の取り組みを行うため、地元のNPO法人グランドワーク西神楽に相談したところ、理事の方が事務所の2階を会場として使用することを提案してくれました。

「とむとむききる」という名前はアイヌ語でホタルを意味します。ホタルの光に安樹子坊守の「子どもたちを照らす未来への明かりを」という思いが込められました。毎週木曜日、午後３時から８時までとむとむききるは開かれ、参加費は無料です。現在、学習スペースを利用する子どもたちは、小学生と中学生で40人以上になることもあります。学習指導には元塾講師やプログラマーが協力し、夕方には近所の食堂が、勉強に集中できるようにと、軽食を安価で提供してくれます。地域の協力がなければこの活動は成り立ちません。

子どもたちは、「家だとだらけるけど、ここなら同級生がいて刺激になる」と楽しんでいる様子で、保護者も「ここで家庭学習のヒントがもらえたようです」と喜びます。すでに地域には欠かせない存在のようです。

安樹子坊守は「地域の人や家族のおかげでこの活動が続けられています。今後も子どものニーズに合わせて息長く活動したい。お寺は人が集い、いのちが尊いと知ることができる場所。この活動がいつかお寺の活動と連携できればよりありがたいと思います」と話しました。

インドやネパール在住のチベット難民への支援「ダーナ・インターナショナル・センター（DIC）」

DIC事務局 ● 備後教区 比婆組 西楽寺　定光 大燈 前住職

ダーナ・インターナショナル・センター（DIC）の活動は、備後教区の北部の住職有志による取り組みで、インドやネパール在住のチベット難民へ支援活動を行っています。昭和40年代後半に白鵠会（住職有志の会）が企画した浄土真宗仏跡巡拝団でインド・ネパールの仏跡訪問をした際に出会ったチベット難民の子どもたちに文房具などの教育支援を始めました。参加者を中心に「ネパール在住チベット仏教徒難民救援の会」というグループを立ち上げて、その後10年間支援活動を継続していました。交流が続いていたカトマンズのチベット難民の学校に校舎を寄贈したことをきっかけに「救援の会」を閉じて、新しくDICを設立して幅広く活動をすることになりました。以来今日まで約30年間チベット難民に対しての支援活動を継続しています。DICになりまして、インドのチベット難民キャンプへの病院施設の寄贈や、水道施設を建設するための費用の送金など、さまざまな支援を行っています。ネパールの方には、チベット難民社会の自治組織であるスノー・ライオン・ファンデーション（ネパール在住チベット難民社会の医療・教育・福祉を担っている）に抗結核剤購入資金を送金し、その後継続して支援していますし、校舎を寄贈した学校には教育資金を毎年贈っています。そのほかの支援としては、ネパールのチベット難民キャンプの中には農業を始めたキャンプもあり、農業がスタートできる資金支援や、エベレストに近いキャンプの学校には校舎の修理費用など単独支援事業もありました。

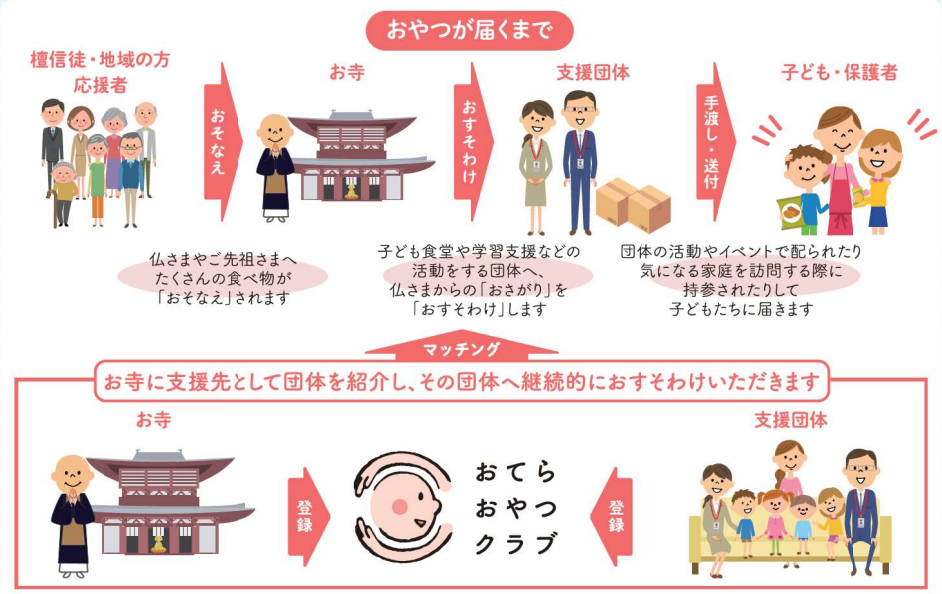
また最近では、2018（平成30）年３月に、宗派が設立母体となるNPO法人JIPPOと共同で、チベット難民の学校で生徒との交流、ネパール人女性の人身売買被害者の復帰施設訪問など、人権問題を考えるためのスタディーツアーも実施しました。

「おてらおやつクラブ」の取り組み

「おてらおやつクラブ」は、お寺へのさまざまな「おそなえ」を、仏さまからの「おさがり」として、経済的に困難な状況にあるご家庭へ「おすそわけ」する活動です。活動趣旨に賛同する全国のお寺と、子どもやひとり親家庭などを支援する各地域の団体をつなげ、お菓子や果物、食品や日用品をお届けしています。

おそなえをおさがりとしておすそわけする習慣は、昔からお寺に根付いているものです。ですから活動を始めるにあたって、特別な準備はいりません。

また、おそなえに限らず、地域のつながりの場、人と人との温もりといったものは、昔からお寺が育んできたものです。しかし現代の社会にないものであり、それを必要としている人がいます。お寺にはあって、社会にないもの、おてらおやつクラブはこの２つをつなげ、解決に導くアイデアです。



※1つの団体におすそわけペースの異なる複数のお寺をマッチング。安定しておすそわけを受け取れるように、マッチングを随時見直します。

この活動は「2018年度グッドデザイン大賞」を受賞しました。

東海教区 額田組 明願寺
おてらおやつクラブ事務局員　松野尾 浩慈

◇◇◇◇◇◇◇ 私の関わり方 ◇◇◇◇◇◇◇

「お寺の『もったいない』を社会の『ありがとう』に」ということばに引かれ、2015（平成27）年から関わり始めました。

最初はまとまったお供え物があったときだけ、取りまとめているお寺に持っていきました。「おやつクラブで食べてください」と用途を指定したお供えをいただくことが徐々に増え、活動が定着してきた頃より自坊で月に一回発送ボランティアを募り、支援団体におやつをお届けしています。

おてらおやつクラブの３つの特徴

1 もったいなくしていたお供えをありがとうに変えられる

お供え物を無駄にしてしまうのはとても心苦しいものです。「おすそわけ」することで、「もったいない」を「ありがとう」に変えることができます。送るタイミングも各寺院に任されているので、無理がありません。おてらおやつクラブ事務局から近くの支援先を紹介してもらうので、発送費などのコストも抑えられます。また、匿名での参加や複数のお寺や青年会などでの合同発送のようにさまざまな参加の形があります。

2 おすそわけ以外の活動の充実

おやつのおすそわけ以外にも、さまざまな選択肢があります。子どもたちに笑顔を届ける「おてらおやつ劇場」を誘致しての紙芝居や人形劇の上演や、フリーマガジン『てばなす』を配布することで貧困問題を知ってもらう活動もできます。また募金による寄付以外に古本を送って寄付をすることもできます。それぞれのお寺の実情に合った活動ができるように工夫されています。

3 コミュニティの広がりと深まり

社会問題を通じて、ご門徒や縁ある方々と共通の課題意識をもつことができ、頼ることのできる居場所として関係性が深まります。近くの支援団体と結びつくことで新たなアクションが生まれることもあります。明願寺での発送作業の際も、ご門徒はごく少数で多くは民生委員やこども食堂関係者、社会福祉協議会の職員といったさまざまな分野の方が集まり、情報交換する場になっています。

それぞれのお寺の事情に合ったやり方で取り組むことができます。不明な点やご相談はホームページよりお問い合わせください。

事例紹介

本願寺派の組や寺院は、他にもこんな活動をおこなっています。

兵庫教区 神姫組 専光寺＊お仏飯でホームレス支援＊

専光寺では寺院活動の一環として、仏教婦人会が中心となってホームレスの人たちへの食事支援を行っています。前住職の時代から、希望があった若いご門徒の家庭にお米を届けており、現在では年間500キロほどのお米を届けるようになりました。このお米は、全てご門徒がお仏飯にとお供えしたもので、ご門徒の賛同を得た上で、お米を必要とする家庭に届けています。お米を届ける活動が発展して、現在では毎月一回「大阪駅前炊き出しと掃除の会」の活動に参加し、いなり寿司をホームレスの人たちに届ける活動を行っています。また、食料の支援だけではなく、自立支援の一助として石鹸やひげそり等の日用品も配布しています。

現在、この活動で必要とするお米は年間約１トンになりました。心配してご門徒が「お米いるか？」と声をかけてくれます。教務所の仲立ちでお米をくれるお寺や、布教使さんの紹介でお米を送ってくれる寺院も増えてきました。ご門徒がお供えしてくれたお米から始まった支援活動は、多くの人とのご縁へと広がりました。

岐阜教区 長良組＊コートジボワールの子どもたちに愛の靴を送る支援＊

この取り組みは、コートジボワールからの留学生とご門徒の交流がきっかけで始まった活動です。同国では平均月収が約３万円で、靴を買うには３千円かかります。その留学生から「使用後の靴でいいのでほしい」との声があり、組で支援活動を行うことになりました。活動はシンプルで、不要となった靴を各家庭で洗浄し、お寺で集めるというもの。幼児から大人、高齢者までが参加できる取り組みで、お金をかけず、体で感じながら、自分たちができる支援活動として地元で定着しています。お寺に集められた靴や文房具は組事務所に集められ、NPO法人と協同して長良組内の仏婦会員、門徒推進員や寺族などが梱包の手伝いをし、送料も街頭募金、寺院・門徒からの寄付、企業からの協賛等によって集めて現地に届けます。その際には、NPO法人の代表が直接現地に行き、現地のNPO法人に渡して、確実に子どもたちに渡せるようにしています。お寺を中心に門徒が集まり、作業をする中で、新たなつながりも生まれてきています。

（第１回 重点プロジェクト大賞受賞）

北豊教区 門司組＊書き損じハガキで奨学金プロジェクト＊

北豊教区門司組では、かつて学生時代にフィリピンの貧困区を訪れた経験のある僧侶が、門司組内においてフィリピンの問題を紹介しました。その結果、門司組重点プロジェクトの一環として各寺院の協力のもと、貧困層の子どもたちの就学支援を行うことにしました。この取り組みの目的は「フィリピン農村部の貧困世帯の教育支援」と「海外支援を通して、組内の啓発、意識改革」です。

門司組の各寺院において、書き損じハガキ、テレフォンカード等の回収を実施し、回収後は、特定非営利活動法人ACCESS（京都　事務所）に送られ、換金された後にフィリピンの貧困層の子どもたちの就学支援活動資金へと使用されます。

2013（平成25）年から始めた取り組みですが、これまで書き損じハガキを約5,000枚、テレフォンカードを約150枚回収し、小学生を２名卒業まで支援することが出来ました。

この取り組みは、私たちが日常的に取り組めるものでした。今後も宗派内に関わらず、社会に開かれたお寺をめざし、社会的活動を行っているNPO等と協働しながら、共に学びあい、助け合い、共生の精神の実践をめざしたいと思います。

※書き損じハガキは400枚で、フィリピンの子ども一人が１年間奨学金を受け取ることができます。

北海道教区 上川南組 天寧寺＊チェルノブイリ被爆児たちの支援＊

天寧寺の前住職、永江雅俊さんは、チェルノブイリ原発事故で被災したベラルーシ共和国の子どもたちを、1993年から2010 年までの18年間、延べ89人、保養里親として受け入れました。この活動のきっかけは、「一か月間放射能から分離させると抗体ができて、二年間健康を維持することができる」というドイツ人医師の見解から、世界十数か国で「転地保養里親運動」が展開されていたことを知ったからでした。それから「NGO 日本ベラルーシ市民友好協会」を設立し、活動を始めました。当初は、言葉、食事など分からないことだらけでしたが、坊守をはじめ家族総出で子どもたちに接しました。また、鼻血を出す子どもが多く、何が起こるか分からない状況の中、寝るときは必ず一緒に寝ました。最初に受け入れた子どもたちが、帰国の前夜、露日辞典を引きながら、「心から感謝します」「親と同じように愛してくれました」「私の家に来て泊まってほしい」とメッセージをくれた時には、永江前住職は涙がこぼれたそうです。

以来、永江前住職は16回もベラルーシ共和国を訪れて現地の人や、受け入れた子どもの家族とも交流を持ちました。

「子ども食堂」開設へ向けたQ&A

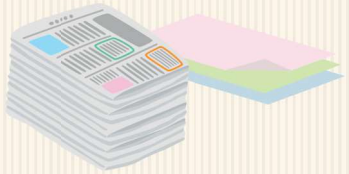
告知・案内

Q 貧困問題を抱えるご家庭だけを対象に呼びかけることは出来るの？

A 貧困家庭だけに対象を絞るのではなく、広範囲に呼びかけを行い利用しやすい環境を整えましょう。その中で利用者それぞれの家庭とのつながりを大切にしながら問題を発見し、それを看過せずさりげなく寄り添うように対応します。貧困探しは新しい差別を生むことになります。その点には充分に注意が必要です。

Q 子どもを集めるための告知はどうしたらいいの？

A 対象とする地域・校区を決めましょう。対象人数の少ない校区ならチラシを作り、教育委員会等の承認を得た上で学校や保育園、幼稚園に配布します。対象人数が多くチラシを作る予算が足りない場合は、自治体や社会福祉協議会が配布している広報紙へ掲載してもらうのも有効な告知方法です。学校の許可をもらえるなら、校内にポスターを掲示してもらうのも良いと思います。またインターネットやSNSも積極的に活用しましょう。



Q あんまり参加者が増えると大変だから、人数制限してもいいかな？

A 予算や協力者の体制などによって食事を提供できる人数が決まります。場合によっては、告知の中で何食分提供できるかを記載の上、事前に申し込みをしてもらい、定員で締め切ってもいいでしょう。事前申し込みで開催する場合は、告知に申し込み先を明記しましょう。

Q どれぐらいの頻度でやればいいの？

A 利用のしやすさを考慮すれば、開催曜日と時間は固定し、毎月または隔週など、定期的な開催が望まれます。ただし、継続した取り組みとするため、主催者の負担がかかりすぎないようにすることも大切です。

Q 子どもが来やすい時間帯や曜日はある？

A まずは教育委員会に相談してみましょう。学校によっては放課後の寄り道を禁止していたり、夕方５時以降の子どもだけの外出を禁止しているところもあります。それぞれの事情に対応し、安心安全に利用してもらえるように開催する配慮が必要です。

行政・学校などとの連携

Q 行政や学校、近隣住民など、誰とどう連携したらいいの？

A 行政や学校との調整は不可欠です。自治体と教育委員会と社会福祉協議会には子ども食堂を「誰がいつどこでどのように開くのか」を報告し、できれば後援申請をしておくといいでしょう。開催に向け協力を得やすくなります。子どもたちが集まると境内地周辺が賑やかになりますので、その旨を近隣の住民の方へお知らせしておく必要があります。また同じようにお寺の総代会や教化団体にも詳しく説明しましょう。誠意をもって説明すれば、近隣や教化団体の方から積極的な協力が得られるはずです。

Q どんな人がスタッフとして必要？

A 食堂の運営全体をマネージングできる人が必要不可欠です。その上で調理を担当する人（栄養士、調理師の方がいればベスト）、また会場の準備や子どもたちのお世話をする人、保護者の話を傾聴できる人（僧侶、教化団体の人など）が必要です。またスタッフは利用者のプライバシーを守ることができる人でなければなりません。さらに、看護師や学校の先生、学生、スクールソーシャルワーカーなどの協力を得ることができれば、活動がより心強いものとなります。なお、スタッフに栄養士や調理師などがいない場合は、食品衛生責任者を置く必要がありますので、保健所に相談してください。

Q 国や行政などから助成金を受けることは出来る？

A 助成金を用意している自治体や企業などがあります。自治体などの窓口へ相談しましょう。また、社会福祉協議会に相談することによって、さまざまな情報を得ることができます。

Q 手伝ってくれる人を集めるにはどうしたらいい？

A 広く募集をかければ、必ず協力をしたいという方がいるはずです。みずから協力を名のり出る方を中心にスタッフを集めると、運営がスムーズにいきます。

会場設備

Q 保健所に相談する必要はある？

A 地域や規模によりますので子ども食堂を開くにあたって必ず保健所に相談してみましょう。お寺の子ども会のように対象を限定する場合は、特に届け出る必要はありませんが、対象を不特定多数で広範囲に呼びかけるなら、保健所への届けが必要です。保健所に相談すると、事前に準備するものや、提出書類のことなど丁寧な指導があります。

リスクへの備え

Q 参加者のケガや事故、食中毒など不測の事態のための備えは必要？

A 必要です。保険会社に相談して、食中毒や事故に対応できる保険に加入します。またスタッフは全員、社会福祉協議会などで加入できるボランティア保険に加入しましょう。なお、手洗いや消毒など基礎的な知識は、スタッフ間で必ず共有しておきましょう。

Q 子どもたちや保護者とどう接したらいいの？

A 利用者のプライバシーを尊重し、安心して過ごせる居場所を作る必要があるので、基本的には様子を見守ることが大切です。その中で様子が気になる子どもや保護者の方がいた場合には、その方のお話しを傾聴するようにしましょう。

食べ物

Q 献立はどうやって考えたらいいの？

A 栄養のバランスを考え献立を決めます。季節に応じた旬のものや、お寺のお斎（とき）（煮物・あえ物・酢の物）のようなものは喜ばれます。利用者にわかりやすいようにメニューとそれぞれ使用した食材を掲示し、子どものアレルギー等にも対応します。利用者が料理を選べるようにできるとさらにいいでしょう。

Q 食品はすべて自前で調達しないといけないの？

A 食材の提供を申し出てくださる方が必ずおられます。また農家、食品会社、フードバンクなどへ協力を要請するのもいいでしょう。フードロスの取り組みをしているスーパーマーケットなどもありますので、アンテナを伸ばして、食品を提供してくださる方や企業を探せば、多くの食材が集まるはずです。

宗　教

Q 子ども食堂で仏教的なこと（読経や法話など）をしていいの？

A お寺で子ども食堂をする場合は、お寺のルール・作法にしたがって開催します。後援をいただく自治体、教育委員会、社会福祉協議会にもその旨を説明すればよいでしょう。なお、会場として公共施設を借りる場合は、そのルールに従いましょう。

Q キッズサンガや日曜学校などと併せて、お寺の行事として開催してもいい？

A これまで取り組んできたキッズサンガや日曜学校に、食事を追加すれば子ども食堂になります。むしろキッズサンガや日曜学校の延長として取り組む子ども食堂があってもいいはずです。堅苦（かたくる）しく考えずこれまで同様、子どもの居場所づくりに取り組んでいきましょう。

西本願寺「みんなの笑顔食堂」

2018.12.18
プレオープン

本山で開催される
子ども食堂「みんなの笑顔食堂」
が2018（平成30）年12月18日にプレ
オープンし、その成果や反省点を踏まえ、
御正忌報恩講中の2019（平成31）年1月13日
に本格オープンしました。
家でもなく、学校でもなく、子どもたち
がほっこり笑顔でいられる場所をめざし、
さまざまな方のご指導やご協力をいた
だきながら、月に一度のペースで
開催したいと思います。

2019.1.13
オープン

データ（2019.1現在）

名　　称	西本願寺「みんなの笑顔食堂」
開催頻度	月１回（16：30 ～ 19：00頃までの開催）
会　　場	本願寺聞法会館
参 加 費	こども無料、おとな200円（おとなの参加費は「子どもたちの笑顔のために募金」に納入します）
告　　知	近隣の小学校、幼稚園、保育園、児童館などにチラシ配布。本願寺派ホームページ、下京区ホームページで告知。
スタッフ	職員、龍谷大学付属平安高等学校インターアクト部
後　　援	京都市
協　　賛	下京区140周年記念事業

お問い合わせは、重点プロジェクト推進室
TEL075-371-5181㈹まで。

Free! 無料塾 築地本願寺「寺子屋」お寺の学び舎
― 慈光院教室 ―

開設趣旨

『お寺の学び舎』は、築地本願寺が運営するいわば現代版の寺子屋です。お寺がより地域・社会に貢献でき、親しみやすい存在となれることをめざして開設いたしました。学習方法は最先端のアダプティブラーニング（イーラーニング）ツールを活用し、個々人のレベルや目標に合わせてゲーム感覚で自己学習いただけます。回答傾向から弱点分析も行うことが可能で学校の授業で分からなかった内容をさかのぼって集中して学習し直すことも可能です。学校の勉強を少しでも好きになっていただき基礎学習能力を高めるだけでなく、お寺ならではの方法で「思いやり」や「感謝の心」などを育むお手伝いができるよう工夫しています。地域の皆さまが心豊かに暮らされるよう、この取組みが少しでもお役に立てたらと考えております。

お申し込み方法

見学の際に直接申し込むか、
または 03-3622-3011 にお電話で
お申し込みください。

- 場　所●築地本願寺慈光院
- 対　象●小学３年生～小学６年生
- 定　員●30人
  （申し込み多数の場合は抽選となります）
- 費　用●無料
- 持ち物●筆記用具など
  （パソコンはご用意しております）

この取り組みは、会場スペースがあれば開設できますので興味のある方は上記問い合せ先にご連絡ください。

「子どもたちの笑顔のために募金」について

浄土真宗本願寺派（西本願寺）では、自他共に心豊かな社会をめざす取り組みの一環として「子どもたちの笑顔のために募金」を行っています。法要や行事などでご協力をお呼びかけください。募金を集める際には、ご寺院・団体において厳正に管理していただきますよう宜しくお願いします。募金のご納入につきましては、下記に明記の口座へお振込みいただくか、宗務所の重点プロジェクト推進室までご持参（現金書留による郵送も可）ください。

「子どもたちの笑顔のために募金」管理委員会で収納の確認や支援先の選定について協議し、定期的に『宗報』・本願寺派ホームページなどで取り組み状況をはじめ募金の使途を報告いたします。

支援先

この募金は、国外では海外にある西本願寺の関係機関などと連携して、貧困に苦しむ子どもたちを支援します。また、国内では子ども食堂や学習支援などの活動、児童養護施設などで暮らす子どもたちのために活用いたします。

郵便振替

口座名　　子どもたちの笑顔のために募金
口座番号　00940-8-282766

※教区や組単位でのご納入の際は、教区名・組名を明記してください。
※他行からのお振込の際は、下記内容をご指定ください。
ゆうちょ銀行　店番099　当座　0282766

あとがき「活動を始めるにあたって」

宗門の実践目標に向けて、私たちはややもすると何か特別な新しい活動を始めなければならないと思いがちではないでしょうか。

しかし、私たちの宗門・寺院の現場においては、日曜学校・子ども会や、子ども・若者ご縁づくりなど、「子どもたちを育むために」という宗門の実践目標につながる取り組みが、これまでもずっと続けてこられました。

外からはわかりにくいかもしれませんが、私たちが目の前にする子どもたちの中には悲しみ苦み困っている子どもが必ずいます。そのような観点を持ちながら、これまでの活動を再構築し充実発展させることはとても大切です。

貧困世帯の子どもだけを対象としても、参加しづらくなるばかりか、人権侵害につながってしまいます。私たちは、阿弥陀さまの「一切衆生・摂取不捨」という願いにもとづき、門信徒はもちろん広く地域の子どもたちに向けた取り組みとなるように、常に心がけておかなければなりません。その取り組みの中で、一人ひとりの子どもたちの様子に気づく時、新たな取り組みへのアプローチが見えてくるのではないでしょうか。そして、その寺院での取り組みにさまざまな人の力が結集した時、お寺だけでなく地域もより活性化していくこととなるでしょう。

これまで「どうせ自分（君）にはできっこない」という言葉が子どもたちの未来をどれだけ奪ってきたことでしょうか。同様に「どうせうち（あなた）の寺院では、そんなことできるはずがない」という言葉を聞くことがありますが、今までやったこともないのにできるはずがないとやる前から自己制限するではなく、「まず、自分ができることをひとつずつはじめていこう」とすることが何より大切なことではないでしょうか。

貧困という経済的な側面だけでなく、子どもたちを取り巻く環境は現在大変厳しいものがあります。「子どもたちを育むために」という宗門の実践目標は、貧困問題だけでなく、総合的に子どもたちを育んでいきたいという宗門の願いが込められたものです。

この冊子では、全国の寺院で行うさまざまな活動の事例や、ノウハウを紹介しました。これらを参考にしながら、いま私たちに始められることを取り組んでいきたいと思います。そのための支援を宗門としても末永く続けてまいります。

執筆協力者（敬称略）
山口教区 大津東組 浄土寺　荻　隆宣
大阪教区 三郡組 西教寺　浅井るり子
東海教区 額田組 明願寺　松野尾浩慈
その他、事例の掲載等にご協力いただいた皆さま
浄土真宗本願寺派総合研究所

重点プロジェクト推進室